

# どんぐりと山猫

宮沢賢治

おかしなハガキが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日  
あなたは、ごきげんよろしいほど、けつこです。  
あした、めんどなさいばんしますから、おいで  
んなさい。とびどぐもたないでくなさい。  
山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もガサガサして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。ハガキを「そっ」と、学校のかばんにしまって、家中とんだりはねたりしました。

ね床にもぐってからも、山猫のにゃあとした顔や、その面倒だという裁判の様子などを考えて、おそくまで眠れませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。表にでてみると、周りの山は、みんなたった今できたばかりのように、「うるうる盛り上がり、真っ青な空の下にならんでいました。一郎は、急いでご飯を食べて、ひとり谷川に沿った小道を、かみの方へのぼって行きました。

透き通った風が「ざあっ」と吹くと、栗の木は、ばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちょっと静かになって、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならぼくの行く方だねえ、おかしいな、とにかくもっと行ってみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木は、黙ってまた実をばらばらと落としました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。笛ふきの滝というのは、真っ白な岩の崖のなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴って飛び出し、すぐ滝になって、ごうごう谷におちているのを言うのでした。

一郎は滝に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」

滝がぴーぴー答えました。

「やまねこは、さっき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、もう少し行ってみよう。ふえふき、ありがとう。」

滝は、またもつのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どつてこ♪どつてこ♪どつてこ♪と、変な楽隊をやっていました。

一郎は体をかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかったかい。」

と聞きました。すると、きのこは

「やまねこなら、今朝早く、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。一郎は首をひねりました。

「南ならあっちの山の中だ。おかしいな。まあ、もうすこし行ってみよう。きのこ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、どってこ♪どってこ♪と、あの変な楽隊をつづけました。

一郎は、またすこし行きました。すると一本のくるみの木の梢を、栗鼠(りす)がぴよんと飛んでいました。一郎はすぐ手まねきして、それをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかったかい。」と尋ねました。すると、りすは木の上から、額に手をかざして、一郎を見ながら答えました。

「やまねこなら、今朝まだ暗いうちに馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」

「みなみへ行ったなんて、そんなことを言うのはおかしいなあ。けれども、もうすこし行ってみよう。りす、ありがとう。」りすは、もう居ませんでした。ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらっと光っただけでした。

一郎がすこし行きましたら、谷川に沿った道は、もう細くなって消えてしまいました。そして谷川の南の、まつ黒な榎(かや)の木の森の方へ、新しい小さな道がついていました。一郎はその道を上って行きました。榎の枝は真っ黒に重なりあって、青空は全く見えず、道はすごい急な坂になりました。一郎が顔を真っ赤にして、汗をポタポタ落としながら、その坂をのぼりますと、にわかにパッと明るくなって、眼が「ちくっ」としました。そこは美しい金色の草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブ色のかやの木の森でかこまれていました。

その草地のまん中に、背の低いおかしな形の男が、膝(ひざ)を曲げて手に革鞭(かわむち)を持って、黙ってこちらを見ていたのです。

一郎はゆっくりと、そばへ行って、びっくりして立ち止まってしまいました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のような変なものを着て、足が、ひどく曲がって山羊(やぎ)のよう、特にその足先ときたら、ご飯をもる「しゃもじ」の形だったのです。一郎は気味が悪かったのですが、なるべく落ちついて尋ねました。

「あなたは山猫(やまねこ)を知りませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげ「にやっ」と笑って言いました。

「山ねこ様は今すぐに、ここに戻ってお出やるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎は「ぎょっ」として、一步うしろに下がって、

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか。」と言いました。するとその奇体な男は、いよいよにやにやしていました。

「そんだったら、はがき見だべ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と、男は下を向いて悲しそうに言いました。一郎は気の毒な

「さあ、なかなか、文章が上手いようでしたよ。」

と言いますと、男は喜んで、息をはあはあして、耳のあたりまで真っ赤になり、着物のえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなか上手いか。」と、聞きました。一郎は、思わず笑い出しながら、返事しました。

「上手いですね。五年生だって、あのくらいには書けないでしょう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生っていうのは、小学校五年生だべ。」その声が、あんまり力なく、あわれに聞えましたので、一郎はあわてて言いました。

「いえ、大学校の五年生ですよ。」

すると、男はまた喜んで、まるで、顔中を口のようにして、「にたにたにたにた」笑って叫びました。

「あのハガキは、わしが書いたのだよ。」

一郎は、おかしいの我慢して、

「一体あなたは何ですか。」と、尋ねますと、男は急にまじめになって、

「わしは山ねこさまの馬車別当だよ。」と、言いました。

その時、風が「どう」と吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいと思って、振り返って見ますと、そこに山猫が、黄色の陣羽織のようなものを着て、緑色の眼を真ん丸にして立っていました。やっぱり山猫の耳は、立つて尖(とが)っているなど、一郎が思いましたら、山猫は「ピョコツ」と、おじぎをしました。一郎もていねいに挨拶(あいさつ)しました。

「いや、こんにちは、昨日はハガキをありがとう。」

山猫は、ひげをピンと引張って、腹をつき出して言いました。

「こんにちは、よくいらっしやいました。実は一昨日(おととい)から、面倒な争いが起こって、ちょっと裁判に困りましたので、あなたのお考えを、うかがいたいと思いましたが、まあ、ゆっくり、お休みください。すぐ、どんぐりどもがまいります。どうも毎年、この裁判で苦しみます。」山猫は、ふところから、巻煙草(まきたばこ)の箱を出して、自分が一本くわえ、

「いかがですか。」と、一郎に出しました。一郎はびっくりして、

「いいえ。」と言いましたら、山猫は大いに笑って、

「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マッチをシュツと擦(す)って、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立っていましたが、いかにも、たばこの欲しいのを無理に我慢しているらしく、涙をぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩がはじけるような、音を聞きました。びっくりして屈(かが)んで見ますと、草のなかに、あちらにもこちらにも、黄金(きん)色の丸いものが、ぴかぴか光っているのです。よくみると、みんなそれは赤いズボンをはいた、どんぐりで、もうその数ときたら、三百でも足りないようでした。わあわあわあわあ、みんな何か言っているのです。

「あ、来たな。蟻(あり)のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そのとこの草を刈れ。」やまねこは、巻たばこを投げすてて、大いそぎで馬車別当にいひつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌(かま)をとりだして、ざっくざっくと、やまねこの前のとこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、きらきら光って、飛び出して、わあわあわあわあ言いました。

馬車別当が、こんどは鈴を「がらんがらんがらんがらん」と振りました。音は、かやの森に、がらんがらんがらんがらんと響(ひび)き、黄金(きん)のどんぐりどもは、すこし静かになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長い服を着て、勿体(もったい)つけながら、どんぐりどもの前に座っていました。まるで奈良の大仏様に参詣(さんけい)するみんなの絵のようだと、一郎は思いました。別当が今度は、革鞭(かわむち)を二三回、ひゅうぱちっ、ひゅう、ぱちっとうらしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかして実にきれいでした。

「裁判も、もう今日で三日目だぞ、いい加減に仲直りをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでも無理に威張(おご)って言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、だめです、なんと言ったって頭のとがってるのが一番偉(えら)いんです。そして、わたしが一番とがっています。」

「いえ、違います。丸いのが偉いのです。一番丸いのは、わたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいから、わたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしの方がよほど大きいと、昨日も判事さんがおっしゃったじゃないか。」

「だめだい、そんなこと。背の高いのだよ。背の高いことなんだよ。」

「押しっこのえらいひとだよ。押しっこをして決めるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言って、なにがなんだか、まるで蜂(はち)の巣をつついたようで、わけがわからなくなりました。そこで、やまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとこころえる。静まれ、静まれ。」

別当が、むちをひゅうぱちつと、鳴らしましたのでどんぐりどもは、やっと静まりました。やまねこは、ぴんとひげをひねって言いました。

「裁判も、もう今日で三日目だぞ。いい加減に仲直りしたらどうだ。」

すると、もうどんぐりどもが、口々に言いました。

「いえいえ、だめです。なんとやったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんと心得る。静まれ静まれ。」

別当が、むちをひゅうぱちつと鳴らしました。山猫がひげをぴんとひねって言いました。

「裁判も、もう今日で三日目だぞ。いい加減に仲直りをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのとがったものが……。」がやがやがやがや。

山ねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんと心得る。静まれ静まれ。」

別当が、むちをひゅうぱちつと鳴らし、どんぐりはみんな静まりました。山猫が一郎にそっと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

一郎は笑って答えました。

「そんなら、こう言い渡したらいいでしょう。この中で一番ばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼく、お説教で聞いたんです。」

山猫は、なるほどと言う風にうなずいて、それからいかにも気取って、着物の胸えりを開いて、黄いろの陣羽織をちょっと出して、どんぐりどもに申し渡しました。

「よろしい。静かにしろ。申し渡した。この中で、一番えらなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていないくて、頭のつぶれたやうなやつが、一番えらいのだ。」

どんぐりは、しーんとしてしまいました。それはそれは、しーんとして、固まってしまいました。

そこで山猫は、黒い服をぬいで、額の汗をぬぐいながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六回、鞭(むち)をひゅうぱちつ、ひゅうぱちつ、ひひゅうぱちつと鳴らしました。やまねこが言いました。

「どうもありがとうございました。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉判事になってください。これからも、ハガキが行ったら、どうか来てくださいませんか。そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかありませんよ。」

「いいえ、お礼はどうか受け取ってください。わたしのじんかくにかかわりますから。そしてこれか

らは、ハガキにかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、やまねこは、まだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日(みょうにち)出頭すべしと書いてどうでしょう。」

一郎はわらって言ひました。

「さあ、なんだか変ですね。 そいつだけはやめた方がいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまずかった、いかにも残念だと言う風に、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言ひました。

「それでは、文句はいままでのおりにしましょう。 そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金(きん)のどんぐり一升と、塩鮭(しおざけ)のあたまと、どっちをお好きですか。」

「黄金(きん)のどんぐりが好きです。」

山猫は、鮭(しゃけ)の頭でなくて、まあよかったと言うように、口早に馬車別当に言ひました。

「どんぐりを一升早くもってこい。 一升にたりなかつたら、芽つきのどんぐりも混ぜてこい。 はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをまずに入れて、はかって叫びました。

「ちょうど一升あります。」

山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。 そこで山ねこは、大きく延び上がって、目をつぶって、半分あくびをしながら言ひました。

「よし、はやく馬車の支度をしろ。」 白い大きなきのこでこしらえた馬車が、ひっぱり出されました。

そして、なんだかねずみ色の、おかしい形の馬がついています。

「さあ、お家へお送りいたしましょう。」 山猫が言ひました。 二人は馬車に乗り、別当は、どんぐりのますを馬車の中に入れました。

ひゅう、ぱちっ。

馬車は草地を離れました。 木や藪(やぶ)が煙のようにぐらぐらゆれました。 一郎は黄金(きん)のどんぐりを見、やまねこはとぼけた顔付きで、遠くを見ていました。

馬車が進むにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車が止まった時は、当たり前の茶色のどんぐりに変わっていました。 そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなって、一郎は自分の家の前に、どんぐりを入れたますを持って立っていました。

それからあと、山ねこからのハガキは、もう来ませんでした。 やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えよよかったと、一郎はときどき思うのです。

おしまい